

旧々碓氷峠を測る (国立国会図書館蔵 伊能大図95号より)

第3次測量の享和2年の項に記録があつて、伊能隊は出羽、越後の海岸を測つたあと、長野の善光寺を参詣、旧々碓氷峠を測つて上州(群馬側)に出た。そのときの状況を国会大図と比べながら眺めてみよう。



「10月14日 朝より晴。六ッ頃、小諸城下市町出立。本町、与良、松井町。城下外 それより松並木あり。右5・6丁に千曲川。加増村(30軒、家は遙に左にあり)。柏木村(160軒)。平原村(160軒)。馬背口(ませろ)村(125軒)。右田地1里余。秋葉山へ2里ばかり。其間は田地と原。左浅間山へ2里ばかり。其間、田地又は原、三ッ谷新田(馬背口村の内、濁川流れ、血川と云う。小諸より3里半)。追分宿(御料所、200軒余、是より中山道)。休宿(昼食)本陣市左衛門」

地勢の観察を細かく記す。北国街道が中山道と合流する追分宿は僅か200軒だった。ここで昼食を摂る。



「それより借宿村（40軒、外新田共80軒、追分より1里3丁）。沓掛宿（168軒、前に古宿新田あり。後に前沢新田、離山新田有）。右、原又は田地、沓掛より1里5丁、合5里26丁、軽井沢宿。七ッ前に着。止宿本陣市右衛門。此夜曇る。晴間に測る。此夜、碓氷峠熊野権現社人共、見舞に来る」

小諸の次は軽井沢泊。5里28町というから20数キロ、間縄または鉄鎖を引き、方位を測る。夜、明日通行する旧々碓氷峠にある熊野神社の神職たちが挨拶に来た。

「同十五日 朝は晴。六ッ半頃、軽井沢出立。碓氷峠を上（のぼっ）て、熊野三社権現の社前に至り諸山を測量す（方位を測る）。此所、則ち信州・上野州の堺。信州佐久郡の終。上毛は碓氷郡の初なり。権現の社家も、信州地内に20軒、上毛地内に20軒、合40軒、社家町と云う。除地なり。信州地は御料所、上毛地は安中領なり。本社中央を界とす。両国の社人、除地界より除地界まで案内す」

行ったことがないので分からないが、今もある熊野神社は見晴らしがいいらしい。諸方の目当ての山々の方位を測る。社殿の中央が国の堺で、群馬側が安中領、上州側は幕府領、社家（神職の家）がそれぞれ20軒というのも面白い。神社と社家の敷地は年貢・賦役を出さない。しかし、伊能隊には免許地域内だけ（除地界から除地界まで）は、前夜の打ち合わせに従い、神職が荷物を運んだり、案内、手伝いをしたという。神様も伊能隊は特別だったようだ。



「それより山中茶屋（坂本宿支配10軒。茶屋本陣丸屋六右衛門へ休）。羽根石茶屋（茶屋4軒、本陣小池小左衛門にて休）、軽井沢より2里半16丁27間、坂本宿（170軒）で休宿（本陣三郎左衛門）。坂本入口に遠見の番所と云あり。往来の人を改なし。それより原村（横川村枝郷53軒）。横川御関所、横川村（74軒）。五料村（25軒）。新堀村（214軒。松井田へ続。坂本より2里15丁、合5里13丁27間）。松井田宿（202軒）。六ッ頃に着。本陣止宿駒之丞。此夜曇天。不測」

軽井沢から古い旧道を通って松井田宿へこの日も約20キロ。松井田までの間に、山中茶屋、羽根石茶屋、坂本宿と3か所休んでいる。坂本には遠見番所があるが通行人は改めない。横川関所は何も悶着は無かったらしい。伊能隊は関所手形を持っていなかった。勘定奉行のお証文は手形以上の証明だといふのである。第2次の根府川関所、第4次の鉢崎関所では、関所役人が手形不所持を指摘したので、問題が起こっている。

いまは、道筋も定かではない旧々碓氷峠を伊能隊はこのように測進した。また、妙義山へも測線が伸び、沿道が美しく描写されているが、これは九州へ向かった第7次測量の往路、文化6年8月13日に測られたもの。忠敬本隊は無測量、坂部支隊が先発し妙義山追分から仁王門前まで測ったあと、合同し諸堂拝観して松井田に八つ半頃戻った。これは、おまけのようなものである。